

ふるさとの
志

はじめに

私たちのふるさと高知には、緑豊かな山、流れ清らかな川、雄大な海など豊かな自然があります。私たちのふるさと高知には、受け継がれてきた素晴らしい伝統や文化があります。私たちのふるさと高知には、あたたかな関わりを大切にし、思いをつなぐ人たちがいます。

この本の資料には、そうしたふるさとの自然、伝統や文化、人々の関わりが描かれています。

ふるさとの思いを寄せてみてください。

きっと、みなさん一人一人が、ふるさとへの思いをあたためることでしょう。

ふるさとは、みなさんがふるさを大切にし、夢や希望をもって未来に向かってたくましく生き抜いていくことを願っています。

それが、ふるさとの志です。

中学校道徳教育用郷土資料集「ふるさとの志」

1	手のひら・・・・・・・・・・・・・・・・	1
2	ブルースター・・・・・・・・・・・・	5
3	村の絆 <small>きずな</small> ・・・・・・・・・・・・	9
4	地球の息吹 <small>いぶき</small> が聞こえる・・・・・・・・	13
5	のいち あじさい街道 <small>かいどう</small> ・・・・・・・・	17
6	家族写真・・・・・・・・・・・・	21

7 ゆずの村の村おこし 25

8 龍馬りょうまの志 — 坂本龍馬さかもと — 29



1 手のひら

「ぼくら、ほんとに勝てるがやろうか。メンバーがそろうのもやっとなのに。」

進一が住む村は、山間部にある人口千人未満の小さな村。少子高齢化が進み、中学生の人数も激減していた。

進一は、中学に入って、渉といっしょに野球部に入部した。二人は、おたがい野球好きで、部活動は、野球部と決めていた。二人の入部によって、野球部は、部員が九人となり、試合にも出られるようになった。しかし、結果は、大差で負ける試合ばかりが続いた。

「進一、あきらめたら終わりやって。練習や、練習しよう。」

渉は、自分自身に言い聞かせるように、進一に声をかけた。

野球部創設当初からの合言葉「あきらめない心」。

この言葉が、進一たちの心の支えだった。進一は、渉の言葉にうなずいた。

二年生になった進一たちは、新入生の入部勧誘活動も行い、部員もなんとか九人そろえることができた。部員は少ないながらも、野球ができる喜びを感じながらチーム一丸となって練習にはげんだ。

そうしてむかえた最初の公式戦。村の応援団の声えんの中、待望の初勝利のチャンスがおとずれた。試合は二対一、相手側リードのままむかえた最終回裏の攻撃。ツーアウトながらランナー二、三いる、一打逆転サヨナ

ラのチャンス。打順は、進一の番だ。

(今日こそ一勝を。)

進一は、相手投手をじっと見て、バッターボックスに入った。初球は、ストライクゾーンと真ん中。

カッキーーン！ 力をこめてふり切った当たりは、強れつなライナーとなった。

(ぬけたか。)

そう思ったしゅん間、打球は、無情にもセンターのグローブに吸いこまれた。

「アウト！ ゲームセット！」

進一は、真っ赤な顔をしてこぶしをにぎりしめた。

「なんで勝てんがな。ずっと練習してきたのに。」

帰りのバスの中、進一は、だまったまま手のひらを見つめていた。

「進一、あきらめたら終わりや。」

後ろの席にいた渉が手のひらを差し出してきた。二人の手のひらは、豆だらけだった。夕日に照らされたバスの窓ガラスに、大つぶのなみだをためた進一の顔が映し出される。進一は、窓ガラスをじっと見つめた。



部員九人の野球部は、道具の手入れ、グラウンド整備、何もかも自分たちでこなさなければならなかった。

雨の日の翌日は特にきつい。まずは、たまった水を取り、地面をならして、ラインを引き直す。広いグラウンドを整えてからやっと練習だ。部員たちにじっとしている時間はない。

「ふう。」

進一は、手のひらを見つめた。

「進一、あきらめない心やぞ。」

渉の声が聞こえた。

「おう、そうやった。渉、キャッチボールやるうか。」

みんなのかけ声が、グラウンドにひびいた。

三年生になった進一は、サードで四番、渉は、セカンドで三番を任された。

夏の県大会地区予選。

初戦は、息もつかせぬ大接戦。試合は両チームともに一点ずつを取り合い、最終回裏、進一たちのチームの攻撃。ツーアウト、ランナー二るい、一打サヨナラのチャンスで、打順が進一に回ってきた。進一は、高鳴る鼓動こどう



をおさえ、深呼吸をしてバッターボックスに入った。

(今日こそ、今日こそ一勝を。)

二るい上の渉を見て、大きくうなずいた。球場内の視線がバッターボックスの進一にくぎ付けになる。進一は、相手投手の投じた球を渾身の力をこめてふり切った。

カッキーーン！ 打球は、するどい当たりのセンター前ヒット。渉が二るいをかけてホームベースにかけこんでくる。ボールが、キャッチャーめがけて返される。

いっしゅんの静けさ。

「セーフ！ ゲームセット！」

われんばかりの拍手と歓声が球場にとどろいた。大歓声中、進一は、ぼうしを深くかぶり直して、手のひらを見つめた。豆だらけの手のひらがにじんで見える。

「あきらめない心」

進一は、手のひらにうかんだ言葉をぎゅっとにぎりしめた。なみだが、後から後から止めどなく流れた。



2 ブルースター

「千尋ちひろならだいじょうぶ。いっしょにがんばろう。」

「う、うん。」

九月から、バレーボール部は、一年生と二年生の新チームになり、私がキャプテンでアタッカーを任された。チームをまとめていくことができるだろうか。不安な気持ちもあったが、副キャプテンとして支えてくれる夏美なつみの助けが心強かった。

私は、キャプテンになってから、一人でこっそり毎朝の練習を始めた。走りこみやサーブ練習。新チームでまずは一勝して、チームをまとめていこうと必死だった。

部活が終わると、夏美といっしょに、チームのこと、練習メニューのことなど話しながら帰った。

「ねえ、夏美。あたしがキャプテンでだいじょうぶやろうか。」

「だいじょうぶ！ 先ばいたちが果たせんかった郡大会優勝に向けてがんばろうや。」

「そうやねえ、まずは、新チームで一勝して喜び合いたいねえ。チームワークも固まるし。」

「うん。千尋、練習メニューやけど、レシーブ、トス、アタックの連けいプレイの練習をもっとしようや。」

「そうしようか。さすが夏美。あたしもそう思いよった。」

夏美と顔を見合わせて笑った。

夏美とは家も近所で幼なじみ。気が合って、いっしょにいと話もはずんだ。

新チームになって、初めての練習試合の日が決まった。九月最後の土曜日。練習にもますます力が入った。ところが、新しいメンバーでのコンビネーションは、なかなか思うようになかった。

「そんなことじゃあ、勝てんで。本気でやりゆうが？ ボールは、あたしに回して。」
私の声ばかりがコートにひびくようになった。

私のいら立つ気持ちをよそに、部室にブルースターの花をかざっている夏美を見ると余計に腹が立った。

部活の帰り、夏美が声をかけてきた。

「千尋、ドンマイ、ドンマイ。みんなにももうちょっと任せていこうや。ねえ、千尋、部室のブルースター、きれいやろう。花言葉、知っちゅう？」

「夏美、何、のんびりしたこと言いゆうが？ もっと真けんにやって。あたしの気持ち、全然分かってないねえ。」

「えっ。」

立ち止まった夏美を置いて、私はかけ出した。

あれから、夏美が、何度か話しかけようとしてきているの



は分かったが、私は、わざと気付かないふりをした。

「夏美には、あたしの気持ち、分かんき。」

不安といらだちをかき消すかのように、私は、毎朝一人、練習に打ちこんだ。

練習試合の日が来た。

「みんなあ、気を引きしめてよ。」

私は、キャプテンとして張り切った。しかし、力を入れて打ったアタックは、全てボールアウト。ここぞという場面でミスをくり返したのは、私だった。試合は、一セットも取れないまま終わった。かたを落としてうつむく私に、メンバーの視線が痛かった。

試合後のミーティングも終わり、ふと気が付くと、部室には、私と夏美だけが残されていた。

「あたしのせいで負けたと思いううがやろう。はっきり言うたらえいやんか。あたしには、キャプテンは、無理やき。夏美もそう思いううがやろ。」

「そんなこと思っていないよ。チームをまとめていくのは、大変や。けど、千尋は、キャプテンとしてがんばりよったろう。」

私は、こぶしをにぎりしめた。

「千尋、毎朝の練習……、チームのこと考えてがんばりよったがやろう。」



※ブルースター

芸西村特産の花。芸西村産が、国内シェアの約九〇%を占めている。ハウス栽培で一年中出荷。
「ピュアブルー」や「ペガサス」という品種も開発されていて、ピュアブルーは、平成二十三年一月、
国際園芸見本市の品評会で、切り花部門の最優秀賞を受賞した。

「夏美、知っちゃったが？」
「千尋ならだいたいようぶって、あたしは、信じちゅうで。
いっしょにがんばっていこう。」
こらえていたなみだが、一気にあふれた。
「ブルースターの花言葉ってね、『信じ合う心』。あたし
と千尋にぴったりやろう。」
「夏美……。」
部室にかざられたブルースターの青がまぶしかった。



3 村の絆きずな

「雨や。」

とつぜん降り出した雨に夏休みの部活は中止となり、清きよしたちは、校舎にかけこんだ。空は一面、黒雲におおわれ、雨は、強れつな激しさで地面をたたいた。

「これじゃ無理や、帰れんで。」

清の通っている中学校は、山の中腹にある生徒数約三十人の学校。山向こうから歩いて通ってくる生徒も多く、この状況じょうきょうで、帰るのは危険だということで、ひとまず体育館に避難ひなんした。

山間部の小さな村は、交通の便も悪く、こうしたことは時折あった。

「またか。」

雨雲が心にまで広がるようだった。いつもなら小降りになったころを見て、避難解除となるはずだが、この日はちがっていた。時間がたっても、雨は、激しくなるばかりで、一向におさまる気配がない。

午後六時ごろ、地面をたたきつけるように降り続く雨とともに、身をゆさぶるほどの地ひびきがあった。

ドドドー、ドドドー！ 向かいの山の頂上から山すそにわたって、大きく土砂どしゃくずれが起こっている。土砂は、とてつもない力で、木々をなぎたおしていた。こんなことになるとは予想もしていなかった。

村の人たちが不安な表情をして、次々と体育館に避難してくる。停電のため、体育館はうす暗い。夜が近づく

につれて、みんなの言葉数が少なくなってきた。

そのとき、

「みんなあ、だいじょうぶですか。」

暗やみに声がひびきわたった。

村役場の人たちが、十人ぐらいいやってきた。発電機

も持ちこんできてくれたおかげで、明かりもついた。

「おう。」

避難してきた人たちからいっせいに声が出る。

「毛布を配ります。みんな、並んでください。」

「薬は、ここです。おにぎりもあります。」

役場の人たちが、てきぱきと声をかけ、物資を配ってくれている。家族と連れらが取れるよう電話の手配もしてくれた。

「帰れるようになったら、むかえに行くき。お父さんも、『自然の家』のお客さんの対応をしゅうと。今晚は、お父さんも帰れんかもしれんき。」

村営宿泊施設「自然の家」で働く父も帰れそうにないらしい。母の声を聞いて、清はとりあえずほっとした。

「全くここは、大変なところや。」



清は、ひざをかかえてうつむいた。

「毛布どうぞ。」

となりですわっていた山中のおばさんが声をかけてくれた。清は、手をほどいて毛布を受け取った。

「おなかすいたろう。ほい、おにぎり。」

「あつ、どうも。」

おにぎりをくれた川村のおじさんに、軽く会釈えしやくをした。

清は、近所の小学生の達也たつやが一人ですわっていることに気付いた。

「達也、どうした？ 一人かえ？」

「ううん、じいちゃんといっしょ。」

達也が指差す方を見ると、達也のおじいさんが、物資を運んでいた。

「だいじょうぶか？」

不安そうな表情の達也と目が合って、思わず手をにぎった。達也の手が冷たい。清は、その手をぎゅつとにぎりしめた。

体育館では、役場の人や先生、大人たちが、休むことなく動き回っていた。気が付くと、体育館に笑顔と声が広がっている。体育館にもる発電機の明かりが温かく感じられた。

夜は長かった。心細かったが、役場の人や周囲の人の声を聞いていると、不思議と心は落ち着いた。





翌日は、昨日の雨がうそのように晴れわたり、避難していた人たちは、次々と家に帰っていった。

「清にいちちゃん、ありがとう。」

ふり返ると、達也が手をふっていた。

「おう。気を付けて帰りよ。」

清は、笑顔で答えた。

しばらくして、父がむかえに来た。

「清、大変やったろう。困ったろうがえ？」

「うん。最初は、どうしたらえいかと思ひよった。でも、みんなが、声をかけてくれたり、毛布やおにぎりをくれたりしたきね。」

「村の絆やねえ。」

父の言葉を聞いて、清は、村の人たちの顔と達也の手を思い出した。

「ありがとうございました！」

清は、体育館の中に向かって大きく礼をし、外に出た。

空は、雲一つない青空だった。

4 地球の息吹が聞こえる

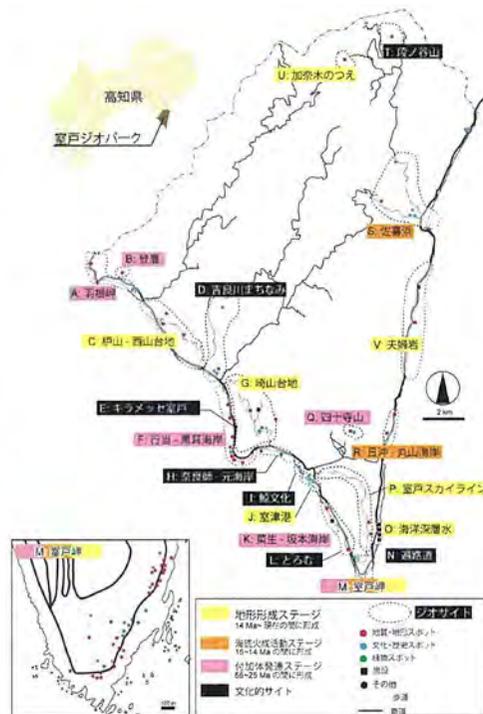
ヒュー、ヒュー。

室戸岬は、風が鳴る。群青の海をわたって吹く風が、岬の岩に当たって音を立てる。

平成二十三年（二〇一一年）夏、岩しかないこの岬が、注目を集めていた。室戸岬や行当岬をはじめとする室戸の地質や自然などが世界ジオパークの認定を目指し、室戸市は、盛り上がりを見せていた。この夏、室戸は、暑かった。

「ジオパークというのは、大地の公園という意味で、地質遺産をふくむ自然公園のことです。昔は、ここ室戸岬のある室戸半島は、海の底にありましたが、大きな地震や地殻変動を何回もくり返して、だんだんと隆起し、地表に現れてきました。室戸の海岸にある地層や化石を調べたら、海底でいつ、何が起こったか、昔の地形がよく分かります。国道のすぐそばでこれほどの地層が見られるのは、世界中探しても室戸だけです。」

ジオパークガイドのおばさんが、室戸岬で、声高らかに語っている映像がテレビに映し出されていた。「ふうん。ただの岩場やと思うけど。」



※図1

室戸岬には、小学三年生の遠足で一度行ったきりだ。

(そうだ。今年の自由研究は、これだな。パンフレットを見て済ませられそうだ。)

慎二は、テレビを消した。

夏休み。慎二は、港近くに釣りに行こうと国道を自転車で走らせた。ちやうど、行当岬に差しかけたとき、少し前を歩いていたおばさんの麦わらぼうしが、強い風にあおられて飛んだのが見えた。

「あっ。」

慎二は、自転車を止めて、転がってきたぼうしを拾った。

「まあ、ありがとう。」

ふり向いたおばさんに見覚えがあった。

「あおう、おばさん……、テレビに出てませんでしたか。」

「あら、見てくれた？」

「ジオパークのガイドさんですよ。ジオパークのことくわしいがですね。」

「いろいろ勉強してやりゆうがよ。室戸の岩や自然のすごさをもっと知ってもらえたらいいなあと思うてね。」

ぼうしをかぶりながらおばさんは言った。

「室戸の岩のすごさ……。」

「あらっ。ねえ、かまんかったら、下の岩場に下りてみんかね。ぼうしのお礼にちよっとガイドさせてや。」
おばさんの目がかがやいていた。

「あっ、ああ、はい……、じゃあちよっとだけ。」

慎二は、とぼとぼと岩場に下りた。

「ええ、今、立っているところは、約三七〇〇万年前の海底です。
このタービダイト層のしまし模様、これは、約四八〇〇メートルの深海で台風や地震が起る度にくずれてきた土砂どしゃが大きくなつ
ぶから順に積もってできたものです。」

「あっ、ほんとや。このしましは、白っぽい砂と黒い泥どろの積み
重なりや。ようこんなにきれいに並んじゅう。」

ぼくのおどろいた顔を見て、おばさんは、ほほえんだ。

「あちらの岩のでこぼこは、そのころの生き物、二枚貝にまいがいがはった
あとで、生痕化石せいこんかせきと言います。向こうの岩の模様は、波打ってい
るように見えるでしょう。これは、海底の水の流れによって作ら
れた模様です。岩場をよく見てみてください。」

慎二は、まじまじと岩場を見つめた。深海の地層。生物がはったあと。刻みつけられた波の模様。これらは、



タービダイト層

約四八〇〇メートルの深海で刻みつけられた大地の記録。慎二が生きてきた十二年間よりもはるか長く、約三七〇〇万年という気が遠くなるような時間を海底で過ごし、ようやく地表に現れた。大地の歴史を知らせてくれている深海からの手紙だ。

「これが室戸の岩……。」

慎二は、顔を上げた。

風が音を立てて岩場をなでる。太古の昔、海の底だった地面に、届くはずのなかった風が吹いている。

慎二は、思わず地面に手をふれた。

—地球の息吹が聞こえる—

（今年の自由研究のテーマはこれだ！ 明日は、他の場所にも行ってみるか。）

おばさんの方をふり返った慎二は、にっこりしてうなずいた。

平成二十三年九月十八日、貴重な地質遺産とそれを活用する市民の熱心な取り組みによって、室戸市は念願の世界ジオパークに認定された。日本では五地域目、四国では初の世界認定となった。

※図1…世界ジオパークネットワーク加盟申請書日本語版（平成22年）17ページより



5 のいち あじさい街道あじさい

野市のいちから土佐山田とさやまだに向かう農業用水沿いの土手に「のいち あじさい街道」と呼ばれるところがある。

土曜日。健太けんたと京介きょうすけは、となり町で行われるサッカーの練習試合に出るため、朝早く自転車で家を出た。あじさい街道に差しかかる手前で、健太は、ここでよく見かけるおじいさんに気付いた。

「あのおじいさん、このあじさい街道でよう見かけるでねえ。何しゆうがやろうか。」

「仕事やない？」

京介は、そっけなく答えた。健太は、おじいさんをちらりとふり返ったが、そのまま自転車をこいだ。試合からの帰り道、六月の空は、今にも雨が降りそうな気配だった。

「もうすぐ六時や。雨も降りそうやき、急ごう。」

京介の声にうながされて、健太もペダルに力をこめようとした。そのとき、あじさい街道で、あのおじいさんを見付けた。

「あれっ、まだ、おるで。朝からずっとおるがやろうか。」

健太は、立ち止まってふり返ったが、せまってくる雨雲に追われて帰り道を急いだ。



翌日、日曜日の昼過ぎ。

「お母さん、物部川ものべがわに釣りに行ってくる。夕方には、帰ってくるき。」

健太は、さおやバケツを自転車に積んで出かけた。

あじさい街道まで来たとき、昨日のおじいさんの姿を見かけた。

(今日もやりゆう。)

健太は、あじさい街道の入り口に自転車を止めて、おじいさんの方に歩いていった。すると、顔を上げたおじいさんと目が合った。

「あっ、こんにちは。あのう、昨日もここにいましたよね。」

「ああ、だいたい毎日、来ゆうぞね。」

「えっ、毎日？ 仕事ですか。」

「ははっ、仕事じゃないけど、あじさいに水をやったり、草を引いたり、ごみを拾うたり。まあ、あじさいの世話よ。」

おじいさんは、約一・二キロメートルにもおよぶこのあじさい街道で、毎日のようにあじさいの世話をしているという。

見わたせば街道にはごみ一つなく、砂利道じりみちの両側には間もなく見ごろをむかえようとしているあじさいが、あわい色の花をたくさん付けていた。

「今は、県外からもたくさんの方が、このあじさいを見に来てくれるようになったけど、昔はそりゃあ、ひどかった。」

おじいさんは、二十数年前のことをふり返って話し始めた。

「昔、ここは、鉄パイプやタイヤのとれたリヤカー、さびた洗たく機やら、ごみでいっぱいやってねえ。役場の人が言うてのけてもろうたけど、何か月かすると、またごみが捨てられちゅう。それやったら、花でも植えてみろうかと思つて、あじさいのさし木を植えてみたがよ。毎日、会社に行く前と帰ってからの二回、水やりをしてね。そのうちあじさいを植える場所を広げて、退職してからは、ここでぎつちりあじさいの世話をしよらあよ。」

「こんな広いところを一人で大変じゃないですか。」

「それほど大変なことはないよ。近ごろでは、手伝ってくれる人もおる。」

ほほえみながら、おじいさんはあじさいを見わたした。

水色のあじさい。さき始めのクリーム色のあじさい。ほんのり赤むらさきのあじさい。この街道は、まるでにじのかけ橋だ。

「きれいやねえ。」



健太は、思わず声が出た。

「おお、あじさいを見に来てくれた人もそう言うて喜んでくれる。それだけでえいがよ。」
おじいさんは、そう言うと、また、あじさいの手入れを始めた。

健太には、あじさいを背にしたおじいさんがなんだか大きく見えた。

次の週の土曜日は、午前中で練習試合が終わった。健太は、帰りにあじさい街道に立ち寄った。

「ぼくもいっしょにやるき。」

「おう、こないだの。」

おじいさんは、健太を見てほほえんだ。

初夏の太陽が照りつける中、健太とおじいさんは、並んで草引きを始めた。

「いっつもきれいにしてくれて、ありがとうございます。」

通りかかった人の声に、健太は、顔を上げ、にっこりした。ふり向くと、笑顔でうなづくおじいさんと目が合った。

流れてくるあせが気持ちいいと、健太は感じた。



⑥ 家族写真

よさこい祭りが近付いた夏の夜。ふだんはあまり話をしない父が声をかけてきた。

「愛、よさこい踊るがは、今年で最後にするがcae?」

「うん。そのつもり。」

商店街のチームに入って、小学三年生のころから踊り始めたよさこい。中三の今年を最後にしようと思っていた。

「今までお父さん、見に行っちゃったことがないき、今年に行こうか。」

「えっ。」

思いがけない父の言葉に、表情がゆるみそうになったが、私は、とっさに口をとがらせた。

「かまんって。だいたいうちは、仕事がいそがしいろう。無理やか。」

「前は、『見に来てや。』って言いよったのに。」

確かに小学生のころは、家族が、見に来てくれないことがさみしかった。よさこいの時期にかき入れ時の商売をしている両親のいそがしさは分かっていたが、家族の声えんに応えて楽しそうに踊っている友達の洋子がうらやましくて、来てくれとねだったこともあった。

「今年を最後にするがやったら……。」

まだ何か言いたそうな父の言葉をさえぎって、二階にかけ上がった。

勉強机の前にすわると、かべにはってある色あせた家族旅行の写真が目に入った。家族写真もこれ一まいだ。洋子は、夏休みや冬休みには、家族で旅行に行ったと言って、うれしそうに写真を見せてくる。

「洋子んちは、えい。」

そう言って父を困らせたこともあった。

「今さらもうえいき。」

写真に向かってつぶやいた。

それ以来、よさこいのことはあまり話さなかった。

よさこい祭り、本番がやってきた。いつもの年にも増して暑い日差しが降り注ぎ、二百近いチームが所せましとあちこちの演舞場えんぶじょうで踊っている。息つく間もなく演舞場を移動して、次々と踊りを披露ひろうした。よさこいの音楽と鳴子のリズムが気持ちをはずませる。

本祭二日目。商店街で踊っているときのことだった。



「洋子！ こっち、こっち！」

洋子の家族の声だ。洋子のお母さんが、ビデオやカメラのレンズを洋子に向ける。洋子は、家族に向かって手をふり、満面の笑みでポーズをきめて踊った。演舞場を移動しているとき、洋子に話しかけた。

「洋子んち、毎年、家族で見に来るね。」

「うん。後で、みんなでビデオ見るがって。けっこう家族で盛り上がるで。愛ちゃんちは、いそがしゅうて来れんろうけど、ほんとは来たいがやないが？ 今年で最後にするって言いよったろう。」

笑いながら洋子は答えた。

「洋子んちは、仲えいねえ。うちは来んでえいって言うちゅう。」
父と話したことが思い出されてうつぶいた。

祭りが終わり、数日がたった夜。勉強机に目をやると、何枚かの写真が重ねて置いてあるのが目にとまった。それぞれの写真の中央には、よさこいの衣装を着て踊る私^{しょう}がいた。

「お父さん、この写真、どうしたがあ？ 洋子んちのお母さんがくれたが？」

「上手に撮れちゅうろう。」



二階に上がってくる父の声が聞こえた。

「お父さんが撮ったがよ。」

ひよいと顔をのぞかせた父の答えに、声が一層大きくなった。

「えっ、来ちよったが？ そんなこと言わなかったやいか。えいって言うちよったのに。」

「いやがっちゅうみたいやったき、こっそり行ったがよ。ちよつとの間やったけど。」

「仕事はどうしたが？ いそがしい真っ最中やろう。」

「愛が、小学生のころ、『来てや。』言うのに、行けんかったきねえ。最後ぐらいはと思うちよったき。」

申し訳なさそうに話す父を見て、目の辺りが熱くなり、父に背を向けた。

「もう、まっこと。仕事を放って来るらあて信じられん。」

「写真、よう撮れちゅうろう。」

背中ごしに、父がほほえんでいるのが分かった。

「うん。よう撮れちゅうね……。」

私は、それ以上言葉を続けられず、写真をかべにはりつけた。

—これも家族写真—

古ぼけた家族旅行の写真のとなりには、はじけるような笑顔の私が並んだ。



7 ゆずの村の村おこし

「このままでは、いかん。馬路村うまじに人がおらんようになる。村を元気にせないかん。」

ゆずのかおりただよう山間の村に、少子高齢化こうれいかの波が急速におし寄せた。

昭和五十四年（一九七九年）、ゆずは大豊作となり、売り値が下がった。倉庫には、売れ残ったたくさんゆずが積まれていた。

「このゆずを使って村おこしができんろうか。そうや、まずは、馬路のゆずのおいしさを分かってもらおう。」

当時、二十七才。馬路村農協なえいのかの営農販売課えいなんばに勤めていた私は、村の特産品販売のイベントがある関西のデパートへ、ゆずの天然果汁かじゅうを売りに行くことにした。

「がんばってきてよ。たのむでえ。」

村のゆず加工場のみんなから、熱いエールをもらい、ビンづめのゆずの天然果汁をトラックに積んで、夕方、加工場を出発した。

夜のやみの向こうに、見送ってくれたみんなの顔が思い出され、ハンドルをにぎる手に力がこもる。



夜通し運転し、翌日の朝八時ごろ、デパートに着いた。

イベントはだいたい一週間続く。毎日、声をからして売り場でお客さんに呼びかけた。それでも、買ってくれる人はわずかだった。私は、泣きたくなくてきた。一週間がんばっても売れないときは、持ってきたゆずのビンをもたまたまトラックに積まなければならぬ。ゆずがずっしりと重く感じられる。

全国各地の販売イベントにも出かけて行ったが、どの会場を回っても、あまり売れない日が続いた。

県の物産展が神戸のデパートで開かれたときのことだ。

馬路村の売り場は、会場のすみのはし。

(こんな場所で売れるだろうか。)

黄緑色のゆずのビンに、馬路のみんなの顔がうかぶ。私は、会場のすみから、だれよりも大きい声でお客さんに呼びかけた。

「馬路のゆずはいかがですか。なべ料理にいいですよ。ちりめんじゃこに合いますよ。」

どんなに大きな声を出しても、なかなか売れない。ただ時間だけが過ぎていった。

かたを落としたそのとき、声が聞こえた。



「売れまっか？」

声をかけてくれたのは、デパートの食品係長だった。

「さっぱりですよ。このままじゃあ、馬路に帰れません。」

「まだ行ったことはないんやけど、私の本籍は馬路村なんやわ。」

(まさかこんなところで、馬路村出身の人に会うなんて。)

「エスカレーターの前でよかったら、特設台が用意できませ。」

「えっ、ほんとですか。」

私の声は、かすかにふるえていた。

場所を移すと人通りも多く、あっという間に人が集まった。ゆずのさ

わやかなかおりが、会場にただよい、ゆずのビンが飛ぶように売れた。

「完売だ！」

商品がなくなった特設台を見つめると、係長がやってきた。

「明日の朝までに、商品、もっと用意できまっか？ この分やったら、まだまだ売れませ。」

「係長さん、ありがとうございます。」

故郷の縁えんに感謝して、私は、思わず係長の手を取った。しかし、持ってきていた商品はもうない。今から農協に電話して送ってもらっても、届くのは二日後。私は、馬路にいる農協の組合長に相談してみた。



「よっしゃ。高知港まで、わしが車で持っていて、そのままフェリーに積んで、大阪まで送るき。大阪南港で受け取ってや。」

「組合長さん、助かる！」

「なあに、馬路をゆずで元気にするがやろう。」

組合長の声にはげまされ、思わずこぶしをにぎりしめた。

私は、夜中の二時半に起きて、高速道路をトラックで走り、大阪南港で荷物を受け取った。デパートの開店に間に合わそうと、神戸に向かって湾岸線がんせんを走る。辺りが明るくなってきた。朝焼けの中に、ゆずの森や馬路のみんなの顔がうかんでくる。

「馬路の村おこしは、これからや。みんなあ、待っちゃってよ。」
窓からの風がとてもさわやかに感じられた。

その後、馬路村農協では、ゆずドリンクやゆずのポン酢すしょうゆなどの加工品を作り、全国各地に産地直送で届けるようになった。馬路村は、今では「ゆずの村」として全国にその名を知られるほどになっている。

※営農販売課…よりよい農作物を作る営農指導と加工品の販売をする課



8 龍馬の志 ―坂本龍馬―

「龍馬、たのむ。知恵を貸してや。」

土佐藩参政の後藤象二郎は、長崎にいる龍馬の所にかけて来た。

「土佐藩は、どうしたらえいがじやろう。このままじゃあ、徳川幕府は、薩摩や長州と戦をするようになる。」

一八六七年、薩摩藩や長州藩は、徳川幕府をたおし、朝廷を中心とした新しい世の中をつくっていこうとする動きを強めていた。けれど、土佐藩は、これまで公武合体を考え、幕府も生き残る道を主張してきた。土佐藩主山内家は、徳川幕府に恩もある。幕府が戦でたおされることは、さけない。これが土佐藩の考えであった。

「そうじゃのう。けんど、わしは、土佐藩を脱藩した者じゃき。今さら藩のために動かないかんということはないろう。」

「龍馬、たのむ。藩の一大事じゃき、まあ、考えてみてくれんかよ。ほんで、わしといっしよに、京における大殿様の所へ行つて、わが藩は、どうしたらえいか考えを言うてや。こんなことが考えられるがは、世の中をよう見てきたおまんしかおらんき。明日、『夕顔』で待ちゆう。たのむぞ。龍馬。」

参政

藩の政治を進める役人

薩摩

今の鹿児島(かごしま)

長州

今

の山口県

朝廷

天皇が政治をするところ

公武合体

朝廷と幕府が協力して

政治を進めること

脱藩

藩のおきてを破って、

藩をぬけ出すこと

京

今の京都府

大殿様

土佐藩十五代藩主山内

容堂(やまうちようとう)

夕顔

土佐藩の船

龍馬

土佐藩の船

龍馬は、土佐では、郷士ごうしという身分の低い武士であった。土佐藩の厳しい身分制度のもとで苦しみ、一八六二年、二十八才のとき、土佐を脱藩した。その龍馬に、藩の参政が、頭を下げてたのむのである。

龍馬は、必死でたのむ後藤の顔をまじまじと見つめた。

「一晚、考えてみらあよ。」

龍馬に考えがないわけではなかった。けれど、なぜ、土佐藩のために、力を貸さねばならないか。脱藩の後、龍馬は、土佐藩にいたころ共に苦しい思いをしてきた仲間たちと長崎に「海援隊」をつくり、今は、海を相手に仕事をしている。土佐藩のために動いたとなれば、海援隊の仲間も快くは思わないだろう。

龍馬は、天をおおいで夜空を見上げた。

（幕府も土佐藩も、荒波あらなみにうかぶ船よのう。勝先生じゃったら、どう言うろう。）

かつて、龍馬は、幕府の役人勝海舟の門下生となり、航海術や世界のことを学んだ。勝海舟は、咸臨丸艦長かんりんまるかんちようとしてアメリカにわたったこともあり、外国にもくわしかつた。

（勝先生は、世界を見て、日本のことを考えよった。日本のこと……。）

夜空の星に、土佐藩で苦しい思いをしてきた仲間の顔がうかぶ。藩のために人生をささげてきた人たちもいた。幕府の命令に従って生きることに苦しむ人たちにも出会った。

郷士

土佐藩の武士は、上士（じようし）、白札（しろふだ）、下士（かし）と分けられ、郷士は、下士に属する身分とされた。

海援隊

長崎の亀山（かめやま）に、龍馬がつくった商業、海運業の仕事をする会社。一八六七年、「亀山社中」から「海援隊」と名前を変えた。

勝海舟

幕末、明治時代の政治家。一八六三年、勝海舟は、山内容堂と会って龍馬の脱藩罪（だつばんざい）の許しをとった。同年、龍馬は、勝海舟の海軍塾（じゅうく）塾頭となる。

咸臨丸

一八六〇年、アメリカにわたった船。通訳としてジョン万次郎（まんじろう）も乗船していた。

(この国は、幕府や藩のためにあるのか。)

龍馬は、夜空の星をじっと見つめた。

明け方近く、港に泊まる藩船「夕顔」に一隻の小舟が近付いた。

「おう、龍馬、龍馬か。よう来てくれた。藩に力を貸してくれる気になったか。」

後藤が、目をかがやかせて声を上げた。

船に乗りこむ龍馬を朝日が照らす。

「こんまいこと言いな。藩じゃ幕府じゃ言いよったちいかん。この国を何とかするがじゃ。戦で幕府をたおしたち、国を動かしていく人が変わるばあよ。世の中の仕組みを変えんと新しい国は、いつまでたってもつくれん。」

龍馬は、力強いまなざしで後藤をじっと見つめた。

「わしは、藩や幕府のために言いゆうがやない。日本を、ここに暮らす一人一人のための国にしていくがじゃ。」

「龍馬、どういうことぜよ。」

「ええか、幕府は、政権を朝廷に返す。『大政奉還』じゃ。ほんで、この国をみんなあの力で動かしていくような新しい国に変えるがじゃ。」

政権

国を治める政治の力

大政奉還

国の政治の力を幕府から朝廷に返すこと

坂本龍馬（国立国会図書館蔵）



あまりの迫力に、後藤は、いっしゅん言葉を失った。

「確かに、戦をせんずつ国を変えていくえい考えじゃ。けど、みんなあで動かしていく国とは、どういうことぜよ。」

「それはのう、まず、外国にもあるみたいに議会いうもんをつくって、ものごとは、みんなでよく議論をして決定するようにする。それから……。」

龍馬は、幕府が政権を朝廷に返した後の新しい国づくりのための方策を話し始めた。これが世に有名な「船中八策」である。

「たまげた。龍馬、ようそんなことを考えたのう。おまんの志は、ふといのう。」
龍馬は、遠く海の果てを見つめた。龍馬、三十三才のことであった。

「船中八策」は、後藤から山内容堂やうどうに伝えられ、土佐藩の建白書けんぱくしょとして幕府に出された。十五代將軍徳川慶喜よしのぶは、これを受け入れ、一八六七年十月十三日「大政奉還」が決まった。「船中八策」は、後の近代国家日本の指針となつて受け継がれていくこととなった。

船中八策

船中八策は、龍馬が語ったものを海援隊の長岡謙吉（ながおかけんきち）が書き記したとされている。勝海舟をはじめ幕府役人の大久保一翁（おおくぼいちおう）、学者の横井小楠（よこいしやうなん）など、龍馬が出会ったいろいろな人たちから学んだ新しい国づくりのための八つの方策が示されている。

建白書

大事な考えを書き、差し出す文書

船中八策

() は、意味を分かりやすくまとめたもの

- 一、天下ノ政權ヲ朝廷ニ奉還セシメ、政令宜シク朝廷ヨリ出ツベキ事。
(幕府は国を治める力を天皇に返す。)
- 一、上下議政局ヲ設ケ、議員ヲ置キテ万機ヲ參贊セシメ、万機宜シク公議ニ決スベキ事。
(上下二つの議会をつくり、ものごとはよく議論をして決定する。)
- 一、有材ノ公卿諸侯及ヒ天下ノ人材ヲ顧問ニ備ヘ官爵ヲ賜ヒ、宜シク従来有名無実ノ官ヲ除クベキ事。
(重要な役には全国からすぐれた人を集めてつける。)
- 一、外国ノ交際広ク公議ヲ採リ、新ニ至当ノ規約ヲ立ツベキ事。
(外国との交際はよく議論をして、まちがいのない約束を結ぶ。)
- 一、古来ノ律令ヲ折衷シ、新ニ無窮ノ大典ヲ撰定スベキ事。
(新しい憲法をつくる。)
- 一、海軍宜シク拡張スベキ事。
(海軍の力を強くする。)
- 一、御親兵ヲ置キ、帝都ヲ守衛セシムベキ事。
(天皇がいる都を守る兵隊を置く。)
- 一、金銀物貨宜シク外国ト平均ノ法ヲ設クベキ事。
(貿易のとき、外国と公平な取引ができるようにする。)

中学校 道德教育用郷土資料集「ふるさとの志」

平成24年3月 発行

発 行：高知県教育委員会

編 集：高知県教育委員会事務局小中学校課

TEL：088-821-4638

FAX：088-821-4926

志